HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ゼドルマイヤー著山田武彦譯「小農經營學」
Author(s)	荒又, 操
Description	紹介
Citation	北海道帝國大學法經會法經會論叢, 4, 194-197
Issue Date	1936-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/10636
Type	departmental bulletin paper
File Information	4_p194-197.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

の犧牲の下に遂行せられた收用地の分配は「農民の不平を一掃し、農村安定の上に大なる効果のあつたこと」である。併し地主に取つての「犧牲」は、土地私有に基く弊害の全責任から彼等をまぬがれしめた點に於て「甘受」せざるを得ない所であるとなす。

第二は、農業經營上の効果である。經營組織に關しては自作農の增大であり、經營規模の上からは大經營農場の著しい減少と、小經營農場の增大とである。小農經營に於ける自作の小作に對する一般的優位は論ずるまでもない。併しこれ等小經營の增大は農業生產に如何に作用するかが問題となる。從來この點に關し悲觀說と樂觀說とあり、著者は後者を支持し次の如く云つてゐる。「均分的土地制度に於ける小經營は指導宜しきを得れば集約的なる農業を行ひ生產力を向上せしめうるであらう」と。事實、平均的には反當生產額に於て總額に於て、土地改革後主要農產物の增大を示してゐる。

四

以上の紹介は、紙數の制限上東歐諸國に於ける私有制土地改革の一般的部分にのみ限られ、本書の重點となるべき特殊的、個別的諸國の歷史的、具体的部分に涉ることが出來なかつた。

惟ふに、この土地改革は、農村不安の急速なる挽回による露國革命の防衛と云ふ政治的目的の達成を除けば、封建的土地制度の殘滓や民族的對立の問題から農民を解放した限りに於て農業の進展に貢獻したであらう。併し改革によつて齎らされた生產力の增大一般については、その諸原因並びに農產物價格の精密なる分析なしには一概に効果を云々することは出來ないであらう。一般的に所有權の制限にもかゝわらず、資本主義の外圍の下に而も個人經營の原則が貫く場合、價格關係を通じてこれ等農民及び農業は如何なる進路を約束されるであらうか。今後に於ける實績の如何と共に興味ある問題を提出してゐるものと云はねばならない。

（協調會發行、菊判七百頁、定價金四圓、送料三三錢）

ゼドルマイア著山田武彥譯「小農經營學」

荒又　操

農業の經營管理或は指導等に於ける豐富な實際的体驗と豐かな學識との基礎の上に、幾多の價値高き研究業績を積んで現時獨逸語系農業經濟學界に有力な一員として其の地歩を占めて居る維納農科大學々長ゼドルマイア教授の代表作　Die

bäuerliche Landgutswirtschaft, 1930 が吾等の同學山田武彥君に依つて極めて刻明に周到に邦譯せられ、其の出版を見た事は喜びに堪へない所であつた。出版が既に本年早々のことであり、之れが紹介も一二行なはれた樣であるから、其の學的價値に就ては今や學界概ね之を知る所であらうけれども、本論叢の刊行に當り、未讀の人の爲めに玆に其の紹介を重ねる事を赦して貰ひ度い。

本譯書には卷頭に恩師高岡先生が序文を寄せられて居り、本書の內容に就ては右先生の言の中に極めて簡結適切に述べられてある。即ち、原著者の理論は「……決して空疎なる机上論に墮するが如きこと無く、何處までも自家の体驗に基き數字に礎を置く處の實證的な調査に據つて居るものであるから、實際家も此の著を繙いて益する處が多いであらう。而かも其の學理的對象に對する著者の取扱方法は極めて周匝、その立論は集約的にして要を盡してゐる。……小農經營學諸家の研究を援用し、之を自家藥籠中のものとして、玆に農業經濟學上の重要なる分野たる小農經濟學の完璧たる体系を築き上げてゐるのであつて、學術上極めて價値高き業績である。」と先生が之を要約論評せられ、折紙を附けて居られる所のものである。

が玆に尙一應其の內容各節に涉つて其の大要の紹介を試みて置かうならば、著者は先づ開題に於て、各國共に「農業生產の重點が小農經營に推移しつゝある」事を述べ、而かも他面此等「小經營に惠れざる收益率及び加重する負債」の事實を見、之に對して妥當な對策の必要を考へる。而して其が爲めには小農經濟の本質に關して正確なる認識が根本前提とならなければならぬとの建前である。即ち此の限りに於ては近時の農業經營諸學者がむしろ一致して殆んど等しく之を認めるに至つて居る所であつて、別に他異はない。が原著者の意圖に於て特色とする所は、從來「小農經營を餘りに一方的な立場から考察して來た。」となし、等しく小農經營と雖も其の本質は其の國及び其の地方により、經營の規模により、販賣地への位置により、農民の心性により、又其他の諸影響により「變化」するものであるから、其に應じて別個の見方を採らなければならないと言ひ、總て一方的理論を排し之れが綜合的立場の必要を考へてゐる點にある。

斯くて著者の小農理解の根基的部分たる第一章（小農經營の本質）に於て、彼は先づ、小農經營を以て其他の農業經營と同樣に營利を本とせる企業と見、之を「收益源」として觀察し得る事を述べ、斯る考察方法の妥當性・有用性の認められる部面を說明してゐる。此の點フオン・デア・ゴルツ、ヴワルツ、ビルンバウム或はヴアーターシユトラツト等、農業純收益に重きを置いた所の一聯の學者の見方が、著者に於て尙小農理解の一照明として用ひられて居る譯である。併し乍ら著者にあつてはあくまで右を單に一照明として認めるに過ざないのであつて、之を以て小農經營に於ける諸現象を剩す處なく說明するものとはせず、小農經營者が「より低い純收益、より寡い資本利子に甘んずること屢々なのは、より高い勞働

所得、より高い總所得に達すればこそである。」となし、從つて茲に小農經營を同時に「勞働源」として考察する所の他の一照明の導入となる。著者の以上の見解に關する限りは瑞西のラウルに概ね一致すると言ひ得るであらう。即ち周知の樣にラウルは農業經營の目標を所得に見て居り、其の所謂所得とは經營者の自家資本に對する利子（收益源）と自家勞力に對する勞働報酬（勞働源）とを含むものであること言ふまでもないからである。

然るに原著者は以上の二照明の外に、更に小農經濟に於ける自給的部面を特に重要視して之れが經濟性を認め、所謂「自給源」なるものを獨立の第三の照明として導入してゐると同時に第四に原著者は家族の大いさと構成、家族の勞働步合、家族の消費欲望等、經營に及ぼす家族の廣汎なる影響をも顧慮せざれば小農經濟の本質の理解は出來ないとなし、彼のチヤヤノフの見解に據る家族經濟としての照明を之に加へてゐるのである。

斯樣に小農經濟の本質を理解する爲めに同時に四種の見方を採る綜合的立場を明示した著者は、此の立場に於て第二章に小農經營の生產要素としての土地、資本、勞働の各々並びに之れが調和に就て說き、而して第二章には其の收益性要素としての經營規模と耕種關係、經濟的地位、價格と價格構成等を論じ、更らに經營者の個性、家族の勞働用役、農業勞働賃銀、耕地整理關係、農地の性狀等の農業經營成果に關係する所を極めて親切に擧例豐かに說示して居るが尙此の問題に關するより深い理論を求めるならば、吾々は進んで直接ブリンクマンやエーレボー等々に向はなければならないのは素より當然である。

斯くて第四章（小農經濟の組織）に於ては、先づ第一に經營計畫の目標並に任務を論じ、「小農經濟の努力は土地所有者並に其の家族の欲望の可及的廣汎なる充足に向けられる。」となし、等しく非資本家的勞作經營に重點を置いて居る諸學者中でも特にエーレボーに近い事を思はせる。而して經營の組織を個々の經營組織と小農經營の集團組織に分つて詳細な說述を與へてゐる。前者に於ては特に小農經濟の自給の意義並びに之れが影響に就いてより深い注意を强調する所あり、後者では農業經營の集團的改善、指導等に於いて考慮すべき複雜なる諸要件を詳細に親切に指示說明して居る。斯くの如きは實際農業指導者にとつて直接的に裨益する所大なるものがあらう。

次に第五章（小農經濟の經營成果）に於ては、經營と家計との合流し合ふ所の小農經營成果算出の困難なるを指摘し、かるが故に之れが數字的把握の爲めには各種の標準を用ひ事情に適應して照査するの要あるを述べ、粗收益、經營費、生產費、純收益、農場地代、地所地代、純收益差額、企業者利潤、農業所得、勞働報酬、總所得、等々の概念規定及び其の算出方法の說明を與へて居るが、之れはラウルに負ふ所最も多いものゝ樣である。此の點に就てのラウルの所說は農業簿記統計上の理論及び用語として萬國農事協會によつて採擇

せられ、之れが國際的統一の道標とさへなつて居るものであつて、我が農業經濟界にも大槪教授其他により既に二三之が紹介を見た事であるが、何れにしても斯學研究者に取つて便する所多大なるものがあらう。而して最後（第六章、小農經營の國民經濟的成果）に原著者は之もラウルの規定せる觀念に從つて「國民經濟的所得」（那須教授の所謂農業に於ける純富生産なる概念と同じ）を以て經營規模の國民經濟に對する關係を考へると共に、更らに之を市場供給、並びに負債關係なる標準をも取り上げて國民經濟との關係に就いて論評を加へて本書を終つて居るのである。

以上簡單な紹介によつても之を知らるゝであらう樣に、原著者は現時の指導的農業經營諸學者の所說を入れ、而かも之を合せ考察せざれば小農經營の眞の理解は出來ないとしてゐるのであつて、其の態度は本書の叙述中終始一貫して諭る所がない。從つて本書は問題毎に、一讀概ね學界今日の見方のある所を知り得るのであつて、此の意味で好個のテキストたり參考書たるものである。尙諸家の著述から引用された多くの表は極めて適切に用ひられて居り、一見無味乾燥なる數字の中から吾人に多大の興味を汲み取らしめ理解を助けしめる。又書中隨所に見る豐富な原著者の農業的智識は透徹した理論的叙述との結びつきによつて讀者を裨益する所多大なるものがある。而かも文學に秀でた譯者の筆は極めて平明であつて爲めに內容の複雜性にも拘はらず讀者をして比較的容易に讀みとらしめる事は本譯書の成功と言ふを憚らない。農業恐慌にかてゝ加へて近年相次で起つた自然的災害により疲弊のどん底に苦惱する我が農業の爲めに、之れが更生の方策は此の書によつて示唆せられる所蓋し少なからぬものがあらう。と同時に、よき經營學書に比較的乏しい我が農業經濟學界に、先年は大槪教授に依つてブリンクマンの名著が譯出せられ、又今度は山田君の努力によつて新たな一書が加へられた事を喜ぶものである。

（昭和十年一月、西ヶ原刊行會發行、菊判、本文二二三頁
定價二圓三十錢）

法學博士 農學博士 高岡熊雄著「樺太農業植民問題」

上原轍三郎

著者が我國農政植民學界の最高權威であることは此處に更めて云ふ迄もないことであるが、一昨年政府が樺太拓殖調査